台大日本語文研究第 37 期
2019 年 6 月，頁 95-115
2019-03-28 收稿，2019-06-02 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201906_(37).0005

太宰治「越級申訴」試論
—從創作手法觀見作者的創造與讀者的想像—

何資宜*

摘要

「越級申訴」（昭和 15.2）為太宰治中期作品，取材自《聖經》，以猶大狂亂的獨白，描寫猶大對於「那個人」（耶穌）錯綜複雜的愛恨情感。發表當時讀者多關注翻案題材，批評改寫內容「新意不足」。然而在太宰治死後（昭和 20 年代至 40 年代），評論家轉而聚焦於作家私生活開展了作家論之論述方向。直到昭和 60 年代以後，才有較多關於原典改寫與敘事手法方面之探討。

過往先行研究大多聚焦於兩大疑點，(1) 太宰為何書寫猶大的背叛、(2) 太宰為何重塑猶大形象。本論文由此出發，首先闡述因〈太宰治之死〉而誕生之〈太宰傳說〉竟以扭曲之姿反射回文本研究，猶大的背叛也因此被解讀為太宰治私生活中各種背叛的象徵。另一方面，這篇改編自聖經的翻案作品之所以會被定調為私小說，與太宰治刻意創造之猶大形像及其獨特的獨白敘事有著極大關聯。本論從中探究作者的創作手法與讀者解讀間的相互關係，進一步檢視〈反私小說作家·太宰治〉之創作特徵。

關鍵詞：翻案作品、太宰傳說、反私小說、創作手法、作者與讀者的共同創作

* 國立高雄大學東亞語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Preliminary Discussion on Osamu Dazai's "*Kakekomi Uttae*": An Observation on a Writer's Creation and Readers' Imaginations from the Perspective of Creative Approaches

Tzo-i Ho*

Abstract

An Kakekomi Uttae (Showa 15.2) is one of Osamu Dazai's mid-period works, drawing the materials from the Bible. At the time when this work was published, many readers criticized his rewritten content as having "lack of originality." However, from Showa year 20 to 40 after the death of Osamu Dazai, the critics started to review writers' interpersonal relationships and Christian ideas. Reviews from the perspective of comparative literature did not become prominent again in criticism until Showa year 60.

This study summarized 2 major questions frequently asked in previous studies: (1) Why did Dazai write about Judas' betrayal? (2) Why did Dazai recreate the image of Judas? Finding that because the hype of *The Legend of Dazai* created by *The Death of Osamu Dazai* reflected textual research in a distorted manner.On the other hand, the reason why this subversive work adapted from the Bible is regarded as an I Novel is significantly related to the writer's intentional creation of the image of Judas and his monologue. Moreover, the acceptance of I Novel and the accomplice relationship between writers' creative approaches and readers' reverse operation can be decrypted.

Key words: Subversive Works, *The Legend of Dazai*, Anti-I Novel, Creative Approaches

* Assistant Professor in the Department of East Asian Languages and Literature at the National University of Kaohsiung

臺灣大學學術期刊資料庫

太宰治「駈込み訴へ」試論
―その創作手法からみる作者の創造と読者の想像―

何資宜*

要旨

「駈込み訴へ」（昭和十五年二月）は太宰中期の作品で、聖書に題材を求め、ユダの「あの人」への錯綜する愛憎の情をつづった小説である。発表当時、翻案小説だといった一面に触れられ、その独創性の乏しさが難じられた。だが、太宰没後（昭和二十～四十年代）において、解釈の視点が一変され、作家論的読みの全盛期となった。さらに、昭和六十年代以降の作品論は、原典からの改編や語り方への関心が高まりつつある。

そして、従来の先行論を大別した場合、①なぜ、ユダの裏切りを小説にしたのか、②なぜ、ユダ像を創り上げなければならなかったのか―といった二つの命題にまとめることができよう。

こうした点を踏まえつつ、本論は、太宰の死にちなんで操作された太宰伝説が、この作品に逆反射することで、ユダの裏切りがねじられた形で太宰の裏切りと一体化されたことをまず明らかにする。そして一方で、この翻案物語（フィクション）が私小説として読まれるにおいて、太宰によって創り上げられたユダ像とその独特な語りに垣間見られる、作者の創造によって導かれた読者の想像の仕組みについて述べ、〈反私小説作家・太宰治〉の創作の特徴を指摘したい。

キーワード：翻案物語、太宰伝説、反（アンチ）私小説、創作方法、作者と読者の共同創作

* 国立高雄大学東亜語文学系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

太宰治「駈込み訴へ」試論
―その創作手法からみる作者の創造と読者の想像―

何資宜

一、はじめに

「駈込み訴へ」（昭和十五年二月『中央公論』）は、聖書に題材を求め、ユダの「あの人」（キリスト）への錯綜する愛憎の情と悲劇に至るいきさつを告白体でつづった短編小説である。この作品に関する論及は多いが、高橋宏宣によると、「太宰治の創作意図に関するもの、ユダの裏切りを内在批評的に読解するもの、作品の生成過程に関するもの、以上の三つに分けることができる。[1]」という。

> 太宰の創作意図を探った論としては、太宰の左翼運動からの離脱体験の反映をユダに見る論、左翼運動のみならず昭和五年から十一年にかけての太宰の実生活における苦悩の投影をユダに認める論がある。内在批評的読解では、初期には、ユダがイエスを「神の子」と見たのか、それとも「人の子」と見たかという点に着目した論が発表され、その後、イエスとユダの対立を、内容、語りの両面から分析するようになった。（中略）／作品の生成過程に関する先行論では、「駈込み訴へ」が先行する文献をどのように取り込んで成立したかについて、詳細な検討を重ねてきた。[2]

先行論の内容から分類すれば、確かにこの三つのタイプに分けることができる。しかし一方で、この作品は難解で謎の多いものであることも認められる。例えば、ここに、そのなぞの一部を列挙すると、「なぜ、この話（筆者注、ユダの裏切りの話）を小説にしたのか

---

1 高橋宏宣（2014.1）「裏切りのエシックス―太宰治「駈込み訴へ」論」『福島工業高等専門学校研究紀要』54、44頁。
2 前掲高橋宏宣、44頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

[3]」・「なぜユダは、イエスを裏切ったのか[4]」や、さらには「なぜに、太宰は、イエスとユダを登場させなければならなかったか[5]」・「翻案は成功したのか失敗したのか[6]」といったものがまずは挙げられる。研究者たちを困らせたこれらのなぞをさらに大別して俯瞰した場合、①なぜ、ユダの裏切りを小説にしたのか（ひいては、裏切りという主題の持つ意味）、②「なぜ、（太宰は太宰の）ユダ像を創りあげなければならなかったのか」（ひいては、太宰の改変の持つ意味）―という、二つの命題にまとめられよう。

一方、「駈込み訴へ」における膨大な量の研究資料をめぐってみると、一つの現象に気付く。それは、先行論のあまりにも顕著な解釈視点の移動である。こうした点について、まずは発表当時の評から見てみよう。

> キリストを売るユダの独白である。作者の野心はともかく、作品としては成功してゐない。これを読めば、聖書の簡潔な美しい記述が思ひ浮かぶし、ユダの解釈にも新味がない。題材がいけなかつたと思ふ。神罰恐るべしといふわけか。[7]

> 太宰治氏の「駈込み訴へ」はキリストを売るイスカリオテのユダの独白調にも、太宰独特の冴え冴えとしたものは見当たらない。本人は奇をてらおうとしてゐるのでもあるまいが、少し考へたはふがよいと思ふ。[8]

> 太宰治氏の小説、『駈込み訴へ』とか『走れメロス』とか、たびたび雑誌で読んでゐて、その才気には感心したが、何か上辷りがしてゐるやうでもの足りない感じがしないでもなかつた。[9]

上掲の評論をみると、発表当時は、同作の翻案小説といった一面

---

3 渡部芳紀（1976.4）「『駈込み訴へ』論」『作品論　太宰治』双文社、146 頁。
4 西原千博（1987.7）「『駈込み訴へ』試論」『静岡近代文学』2、28 頁。
5 高橋清隆（1986.9）「太宰治「駈込み訴へ」と聖書」『静岡近代文学』1、35 頁。
6 陸根和（1995.3）「『駈込み訴へ』論」『実践国文』47、61 頁。
7 石坂洋次郎（1940.1.31）「文芸時評」『読売新聞』
8 嵯峨伝（1940.3）「創作月評」『新潮』新潮社。ただし引用は池内輝雄編（2007.10）『文藝時評大系　昭和編I第十七巻　昭和十五年』ゆまに書房、139 頁による。
9 宮田茂子（1941.11）「太宰治氏の『東京八景』其他」『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、297 頁。

臺灣大學學術期刊論文

に触れた言及が目立ち、独創性の乏しさが難じられたことがたやすく見受けられよう。だが、面白いことに、「昭和二〇年代から四〇年代にかけ」、正確に言えば太宰没後において、作品解釈の視点が一変され、「作家論や、作家とキリスト教との関わりをさぐるためのもの[10]」が主流となり、作家論的読みの全盛期となるのである。

むろん、読者の＜読み＞の是非を問うのは本稿の目的ではない。ただ、逆にここで一つ疑問に思うのは、登場人物に作家・太宰治の影を懸命に見いだそうとするこれらの＜読み＞は、果たして読者の勝手な想像であろうか、ということである。こうした点において、本稿は、読者による受容の過程およびその読解の枠組みを検討することを出発点とし、作中におけるエクリチュールとレクチュールの相関関係、つまり作者の創造（それを陰で手助けするメディアの創造をも含む）によって導かれた読者の想像の仕組みを明らかにすることを目的とする。

二、ユダの裏切りと太宰治の裏切り

まずは、同作について、その登場人物に作家の影を見いだそうとする数々の論に言及したい。この類いの先行研究における共通点として、執拗なほどに＜ユダとキリストとの関係＞に着目することと、ユダのイエスへの「愛憎の思い[11]」に言及されるといった点が挙げられる。

その第一声を発したのは臼井吉見氏であるが、その論から受け継がれた解釈の方向も、徐々にユダ＝現実家・現実主義者／キリスト＝精神家・理想主義者と定義することへと傾き、しまいには「そこに、前期の純粋な、生活などには目もくれぬ、精神の王者をめざした太宰の姿と、中期の、生活に妥協を始めた太宰の姿とが投影され、結局、中期の世界に踏み入り、前期の己れを断ち切る様子が極めて

[10] 渡部芳紀（1976.9）「『駈込み訴へ』論」『作品論　太宰治』双文堂、145 頁。
[11] 前掲渡部芳紀、146 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

象徴的に語られている[12]」との主張まで示されるようになった。

さらに、こうした図式的な解釈の構図は、「青年期における左翼非合法運動からの離脱と、そこでの心理的体験がおそらく基礎となって[13]」いるという説を出発点とし、その後においては「昭和五年から十一年にかけての太宰の生活は極端に言えば裏切ることの連続であった。（中略）それらのことがらは、ある時は、青森の保守政治家として活躍していた長兄文治を中心とする故郷への裏切りであり、初代への裏切りであり、友人への裏切りであった。[14]」といった私生活にまで言及されるようになる。

そして、こうした状況を考えるにおいて、＜なぜ、ユダの裏切りを小説にしたのか。＞といった類いの疑問を検討するに際し、まず太宰研究者の脳裏には、数え切れないほどの太宰治の裏切りが過ぎてしまうからではないかと考えられる。これらの言説は結果として、「作品世界と作者との境界がはっきりしないままに論が展開してゆくのが、多くの『駈込み訴へ』論に共通する難点[15]」という印象を抱かせる要因ともなる。つまり、逆に言えば、「ユダは永遠の裏切り者[16]」という知識が、ここでは、作品の内容をその外部に存在する太宰治へとつなぐ、一種の回路となってしまっているのである。

では、話をここで、登場人物＝作家太宰治という読みは果たして読者の勝手な想像であろうか、という疑問に戻す。言うまでもなく昭和十年代においては、私小説的な読みが文壇を席巻している。ただ、前述したように、発表当時においては、「太宰の独特な冴え冴えとしたものは見当たらない」「新味がない」といった論評が主流である。作中人物を作家・太宰治として読む者は意外に少ないのである。管見の限り、同時代において作中人物に太宰治の姿を見いだした主張として、以下のようなものがある。

---

12 前掲渡部芳紀、157 頁。
13 亀井勝一郎（1960.2）「作品解説」『太宰治全集 4』筑摩書房。
14 前掲渡部芳紀、164 頁。
15 前掲陸根和、61 頁。
16 前掲高橋清隆、33 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

『駈込み訴へ』の中に描かれてゐるものは、ユダでもなければキリストでもない。太宰治自身の姿だ。この言ひ方は平凡に聞こえるだろう。（中略）私も途中で、幾度かさう思ひ、太宰治のために惜む気持にさへなりかけた。（中略）。やはり太宰治といふ奴は、文学の大切な的を狙つてゐる奴だ、新人中の新人だと、一部具眼の士が期待をかけてゐる理由も、これで解ると思つた。[17]

発表当時においては異例とも言える上掲の林氏の説からみると、まず、太宰のこの翻案物語は時評家からは「惜む」などの声が上がり不評であることが再確認できるが、ここにもう一つ見逃してはならない言葉がある。その言葉とは下線部の「新人中の新人」であり、その後の文にも「太宰治は、まさに新人である[18]」という言葉が記されている。

ここでは、林氏が示した上掲の言葉を念頭に置きながら、「昭和二十年代から四十年代」における作家論的な読みが、果たしてどのように生じて来たのか、という点について考えてみる。まず、その答えを探るには、昭和二十三年（1948 年）の＜太宰治の死＞を、メディアが一大事として報じた状況に光を当てる必要があると考えられる。＜太宰治の死＞をいち早く報道したのは、昭和二十三年六月十五日付の「朝日新聞」で、その翌日からは、各新聞紙において連日のように大きく報じ騒ぎ立てられることとなる。また、その内容としては、太宰の知人や友人といった、一部の太宰関係者による賛美調の追悼文が各紙面を圧倒的に飾る一方で、＜作家太宰治の情死事件＞に対する批判も紙面に飛び交うといったものである。そして、＜一作家の死＞が、とうとう「『有島武郎以来の情死事件』、『芥川龍之介自殺以来の事件』とさわがれて、多くの読者を驚かせ[19]」るよう

[17] 林房雄（1940.3）「新人の世界―文芸時評」『文学界』。ただし引用は、（1975.11）「月報 3」『太宰治全集　第三巻』筑摩書房、7 頁による。なお、引用文中の下線は筆者による。
[18] 前掲林房雄、8 頁。
[19] 山内祥史（1976.5）「太宰治の死と反響―その直後の新聞紙面を中心に」『国文学』21（6）、161 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

になったという。

なお、＜太宰治の死＞に絡み合った太宰関係者の回想の背後には、太宰治の「名誉挽回」のためといった意向はもちろん、出版関係者の宣伝目的としたものなど、実にさまざまな思惑が入り交じっていると見られるが、その副産物として、各関係者が協力した形で作り上げられた＜太宰伝説／太宰神話＞も生じてきたのである。そして昭和三十年代以降、文献学的研究の成果によって太宰に関する膨大な伝記的知識が貯蓄されたが、＜太宰治の死＞によって文壇に飛び交う＜太宰伝説＞も、そうした伝記的研究にある程度の手助けをしたわけである。そのため、こうした状況で＜ユダの裏切り＞を主題としたこの小説を読めば、作品内部の記述と作品外部の生身の作家をリンクさせ、「昭和五年から十一年にかけての太宰の犯した、裏切り行為[20]」が想起されてもおかしくはないであろう。

そして、ここまでの論を振り返ると、作品発表当時において、＜登場人物＝作家太宰治＞という図式的な読みや論評がほとんど見当たらない理由も、おのずと浮上してこよう。つまり、昭和十年代にも「作品を、作家から離れた署名なしの一個の生き物として独立させては呉れない。[21]」という風潮はあったものの、当時の太宰治は、まさに「新人中の新人」であったため、＜登場人物＞から＜作家・太宰治＞へと渡るまでの「ゴシツプめいた材料[22]」が十分ではなかったのである。しかし、その後において、いわば、作家の死にちなんで生成された文壇の共通理解（＝太宰伝説）が、＜作家太宰治＞没後の私小説的な読みを支える土台を整えつつこの作品に逆反射し、

---

20 玉置邦雄（1974.10）「『駈込み訴へ』の意義」『日本文芸学』9、69頁。

21 太宰治（1938.8）「一歩前進一歩後退」『文筆』。ただし引用は、（1977.2）『太宰治全集　第十巻』筑摩書房、117頁による。

22 「読者の下等な好奇心を満足せさるために、多少ゴシツプめいた材料などを交錯させて神妙な五、六枚にまとめあげるのが、作家の義務であるなら、作家は衰弱するばかりである。（中略）読者もよくないのである。私は、現代（昭和十五年）の読者を、あまり、たよりにしてゐない。」太宰治「大恩語らず」（1940.5の執筆とされる）雑誌未掲載。没後、「文章倶楽部」（1954.7）に「太宰治未発表原稿」として掲載された。引用は、（1977.2）『太宰治全集　第十巻』筑摩書房、209頁による。

臺灣大學學術期刊論文

それによって初めて、ユダの裏切りがねじられた形で太宰治の裏切りと一体化されたのである。

三、太宰のユダ像と読者の太宰像

周知のごとく、「駈込み訴へ」は「新約聖書の内容を直接下敷きにした唯一の小説[23]」である。ただ、比較や翻案といった視点で『新約聖書』と真正面から向き合うものは、膨大な研究の全体量からみれば決して多いとは言えず、それも昭和五十年以降から大量に現れてくるのである。

そして太宰のオリジナリティーに注目したこれらの論説においても、〈作者＝作中人物〉という端的な解釈こそ回避されているものの、やはり所々に＜作家・太宰治＞への言及が見られ、作者・太宰への関心を完全に抜け出せていないことがうかがえる[24]が、こうした点は、＜太宰神話＞が作品の解釈を強く拘束していることを裏付けているものと言えよう。しかし、ここで筆者が特に指摘したいのは、この作品を解釈するに際し、太宰のオリジナリティーに注目すればするほど、逆に私小説的な読みに陥ってしまう可能性があるという点である。換言すれば、『聖書』を下敷きにして書かれたこの翻案（フィクション）物語が、作家・太宰治の＜私小説＞として読まれてきた最大の鍵は、不思議にも太宰治による改変の部分に潜んでいるということである。

「駈込み訴へ」が完成されるまでの先行する文献について、例えば、『新約聖書』に関しては、複数の福音書の記述が踏まえられていることが明らかにされており、さらに、昭和九年から始まった山岸外史との交友や、山岸の『人間キリスト記』（昭和十三年十一月、第一書房）の影響も指摘されている。

そのうち、まず、『新約聖書』との影響関係について説明しよう。

---

23 前掲陸根和、70 頁。

24 ここで一つ例を挙げると、「駈込み訴へ」と「人間キリスト記」との影響関係を明らかにした田中良彦の論は、両者を比較照合した上で「太宰と山岸の聖書・キリスト教を軸とした交友の有無を明らかにし、その理由・内容・性格および太宰への影響を考察した」としている。田中良彦（2009 新版）「太宰治と山岸外史」『太宰治と「聖書知識」』朝文社、70 頁。

臺灣大學機構典藏

『聖書』からの引用はユダの回想に集中しており、＜マリヤの香油事件＞＜エルサレム入城＞＜最後の晩餐＞といった著名な聖書エピソードが中心となっているという。そして、「駈込み訴へ」と『聖書』の記述を子細に確認すると、＜エルサレム入城＞の記述はほぼ『新約聖書』から大幅に引用しているように思われる一方で、＜マリヤの香油事件＞と＜最後の晩餐＞の部分は太宰による小さな改変がうかがえる。

また、『人間キリスト記』と「駈込み訴へ」を比較照合すると、〈イエス＝理想主義者／ユダ＝現実主義者〉あるいは〈マリヤへの「特殊な愛」〉といった、従来においては太宰独自の解釈とされてきたこれらの部分は、実は『人間キリスト記』の影響によるものだったということが明らかとなる。さらに、結末部分において、「『聖書』にはない太宰の創作」と思われ、「重大事を読者に暗示的に伝える無気味な効果をもった[25]」〈夜に囀る小鳥〉の鳴き声でさえ、『人間キリスト記』の「ゲツセマネの園において」という章に「夜のねむりを破られた鳥の声[26]」といった記述が現れているのである。そして最も議論される、「私の名は、商人のユダ。へつへ。イスカリオテのユダ。」という終わりの一句であるが、この「商人」という設定も、『人間キリスト記』の「ユダの章」で描かれたものである。

ならば、「駈込み訴へ」における太宰の独創とは果たして何であろうか。それは太宰のユダ像と、全編を貫いたユダの語りであると思われよう。周知の通り、聖書におけるユダへの言及が極めて少ないが、一方太宰の「駈込み訴へ」では、冒頭部において、ユダへの描写は年齢から身の上まで詳しく述べられている。

それらに関するものを抽出すれば、例えば「「私はかう見えても、

---

25 前掲陸根和、68-69頁。

26 「ペテロは不思議にしづかな夜を感じてゐた。怪しい鳥の翼音に、耳を澄ませた。草むらに消へていつた不気味なもの音に、心をとられたこともあつた。」／「この足音に夜のねむりを破られた鳥の声が、高い空で、四つ五つとつづいた。羽音が梢をかすめて飛んだ。森のなかの静けさは、破られた。」山岸外史（1949.2再刊）「ゲツセマネの園において」『人間キリスト記』書肆ユリイカ、243-250頁。

臺灣大學學術期刊論文

決して吝嗇の男ぢや無い。それどころか私は、よつぽど高い趣味家なのです。」／「私は、もともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家といふものを理解してゐると思つてゐます。」／「自分でもそれを下品な嗅覺だと思ひ、いやでありますが、ちらと一目見ただけで、人の弱点を、あやまたず見届けてしまふ鋭敏の才能を持つて居ります。」／「私だつて若い。私は才能ある、家も畠もある立派な青年です。」といったものが見られる。これらの記述は無論『新約聖書』・『聖書知識』・『人間キリスト記』といった先行文献には見当たらないものである。

そして太宰によって作り上げられたこれらのユダ像は、その読者の目にはまた違う形に映されてしまうのである。これまでに言及されてきた太宰のユダ像のうち、以下のようなものを抽出して眺めると、ある共通点に目が引かれる。

> 太宰もどちらかといえば、美しい顔をした男としてのユダを脳裏に描いていたであろうと思えるのである。[27]
>
> さて、ユダは資産家の子弟にしてインテリということになりました。そしてそれにふさわしく、皮肉に物を見ることにも堪能で、たいそう自意識の発達した青年のようです。そういう点では作者太宰にも近いし、太宰治の読者たる私どもにも近いわけです。[28]
>
> 己を＜受難のユダ＞に仕立てる、太宰の裏返されたナルシズムのあらわれでもあろう。彼はしばしば彼特有の含羞や自虐をまといつつユダを演じ、またキリストを演じた。[29]

上掲の各引用文それぞれの下線部に注目すると、「美しい顔をした男」（菊田義孝）／「自意識」過剰（山田晃）／「ナルシズム」「彼特有の含羞や自虐」（佐藤泰正）といった言葉は、まさに＜太宰治の

[27] 菊田義孝（1976.5）「ユダの心」『国文学』21（6）、98 頁。
[28] 山田晃（1983.3）「論語・聖書・愛―「駈込み訴へ」雑記―」『一冊の講座　太宰治』有精堂、31-33 頁。
[29] 佐藤泰正（1998.6）「ユダにしてキリスト、あるいはバプテスマのヨハネ―太宰治と聖書」『ユリイカ』青土社、41 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

死＞から長く引き継がれてきた太宰伝説、あるいは太宰的イメージと重なっていることが認められる。

また、「私と同じ年です。三十四であります。あのひとよりたつた二月おそく生まれただけなのです。」という記述が、作中では三回ほど繰り返して強調されているが、これもまた太宰の独創である。そして面白いことに、本作が執筆された際の太宰の実年齢は三十二で、作中の「あの人」や「ユダ」との年齢差もちょうど「たつた二」歳となっている。前述したユダの人物造形と合わせて考えると、太宰によって創り上げられたこれらのユダ像が、生身の太宰を彷彿させて見えるのは果たしてただの偶然であろう。

ここでさらに付け加えて言うならば、太宰のオリジナルなユダ像のみならず、全編を貫いたその独特の語りこそ、＜読者の太宰像＞を呼び寄せる重要な役割を果たしていると思われる。

『聖書』『人間キリスト記』と太宰の「駈込み訴へ」を並べてみると、その語りの表現や焦点人物の違いが一目瞭然である。ここでは、同作のクライマックスである＜最後の晩餐＞を例に、『聖書』『人間キリスト記』それぞれの表記を列記して比較する。

（1）『聖書』

夕餐より起きて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとひ、尋で盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏ひたる手巾にて之を拭ひはじめ給ふ。斯くてシモン・ペテロに至り給へば、彼いふ『主よ、汝わが足を洗ひ給ふか』イエス答へて言い給ふ。『わが為すことを汝いまは知らず後に悟るべし』ペテロ言ふ『永遠に我が足をあらひ給はざれ』イエス答へ給ふ『我もし汝を洗はずば、汝われと関係なし』シモン・ペテロ言ふ『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』イエス言ひ給ふ『すでに浴したる者は足のほか洗ふを要せず、全身きよきなり。斯く汝らは潔し、されど悉とくは然らず』これ己を売る者の誰なるを知りたまふ

臺灣大學學術期刊資料庫

故に『ことごとく潔からず』と言ひ給ひしなり。[30]

（2）『人間キリスト記』「耶蘇、弟子の足を洗ふ」

『この時、イエス夕餐より起ちて、上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとひ、尋で盥に水をいて、弟子たちの足を洗ひ、纏ひたる手巾にて、之を拭ひはじめ給ふ。斯くて、順次、シモン・ペテロに至り給へば、彼シモンいふ。「主よ、汝、わが足を洗ひ給ふか。」イエス答へていひ給ふ。「我がなすことを、汝、いまは知らず、後に悟るべし。」ペテロ、さらに尋ねていふ。「永遠に、我足をあらひ給はざれ。」イエス、また、答へていふ。「我、もし、汝を洗はずば、汝、我となんらの関係もなし。」シモン・ペテロいふ。「主よ、我が足のみならず、手をも頭をも洗ひ給へ。」イエス言ひ給ふ。「すでに浴したるものは、足のほか洗ふことを要せず。全身きよきなり。」』

これが、十字架の近づいてゐる前晩の耶蘇の心持であつた。耶蘇は、そんな心境で、弟子達の足を、ねんごろに洗つてやつたのである。

（3）「駈込み訴へ」

みんな食卓に着いて、いざお祭りの夕餐を始めようとしたとき、あの人は、つと立ち上り、黙つて上衣を脱いだので、私たちは一体なにをお始めなさるのだらうと不審に思つて見てゐるうちに、あの人は卓の上の水甕を手にとり、その水甕の水を、部屋の隅に在つた小さい盥に注ぎ入れ、それから純白の手巾をご自身の腰にまとひ、盥の水で弟子たちの足を順々に洗つて下つたのであります。弟子たちには、その理由がわからず、度を失つて、うろうろするばかりでありましたけれど、私には何やら、あの人の秘めた思ひがわかるやうな気持ちでありました。あの人は、寂しいのだ。極度に気が弱つて、いまは、無智な頑迷の弟子たちにさへ縋りつきたい気持ちになつてゐるのにちがひな

[30] 日本聖書協会編（1981）「ヨハネ」『旧新約聖書引照附』日本聖書協会、一三4-11。

臺灣大學學術期刊資料庫

い。可哀想に。あの人は自分の逃れ難い運命を知つてゐるのだ。その有様を見てゐるうちに、私は、突然、強力な嗚咽が喉につき上げて来るのを覚えた。矢庭にあの人を抱きしめ、共に泣きたく思ひました。（中略）あの人も少し笑ひながら、「ペテロよ、足だけ洗へば、もうそれで、おまへの全身は潔いのだ、ああ、おまへだけでなく、ヤコブも、ヨハネも、みんな汚れの無い、潔いからだになつたのだ。けれども、」と言ひかけてすつと腰を伸ばし、瞬時、苦痛に耐へかねるやうな、とても悲しい眼つきをなされ、すぐにその眼をぎゆつと固くつぶり、つぶつたままで言ひました。「みんなが潔ければいいのだが。」はツと思つた。やられた！　私のことを言つてゐるのだ。私があの人を売らうとたくらんでゐた寸刻以前までの暗い気持を見抜いてゐたのだ。けれども、その時は、ちがつてゐたのだ。断然、私は、ちがつてゐたのだ！　私は潔くなつてゐたのだ。私の心は変つてゐたのだ。ああ、あの人はそれを知らない。それを知らない。ちがふ！　ちがひます、と喉まで出かかった絶叫を、私の弱い卑屈な心が、唾を呑みこむやうに、呑みくだしてしまつた。言へない。何も言へない。あの人からさう言はれてみれば、私はやはり潔くなつてゐないのかも知れないと気弱く肯定する僻んだ気持が頭をもたげ、とみるみるその卑屈の反省が、醜く、黒くふくれあがり、私の五臓六腑を駈けめぐつて、逆にむらむら憤怒の念が炎を挙げて噴出したのだ。ええつ、だめだ。私は、だめだ。あの人に心の底から、きらはれてゐる。売らう。売らう。あの人を、殺さう。さうして私も共に死ぬのだ、と前からの決意に再び眼覚め、私はいまは完全に、復讐の鬼になりました。

引用文において、波線部は『聖書』『人間キリスト記』と同作の三者の記述が重なっていると思われる部分であり、下線部は太宰オリジナルの箇所を示すところである。そして、このように並べてみると、『聖書』とそれを下敷きにした『人間キリスト記』の焦点人物がイエスであるのに対し、「駈込み訴へ」のそれはユダとなっているこ

臺灣大學學術期刊資料庫

とが分かる。

焦点人物の改編のみならず、上のような比較においては、もう一つの違いも浮上してくる。『新約聖書』の四福音書の三人称の語りは、「全知の視点から、事後的に、ユダの裏切りによるイエスの死を記述[31]」していることは言うまでもないが、一方、「駈込み訴へ」の場合は、錯乱に身を任せている「私」(ユダ)が、「あの人」(イエス)について一方的に訴える形式を取っている。そしてその個性的な独白によって、以下に示す論評のような、実にさまざまな読者想像が誘い出されるのである。

> 『駈込み訴へ』は太宰治特有の、息もつかせぬ饒舌の語りが印象的な作品である。そのために太宰調になりすぎている感じは否めないが、そうであるためにユダが極端に作者を引き寄せられている。作者と作中人物の一体化の成立という点では『駈込み訴へ』は申し分なく効果的であるが、そこから現れたのがユダとイエスのある意味での逆転ではなかろうか。[32]

> 「駈込み訴へ」は、キリストを裏切って訴えでたユダの一気のおしゃべりで全篇が出来上がっている。こういう独白体の文体は太宰の最も得意とするところである。[33]

> 「走れメロス」を別にすれば、「女の決闘」「駈込み訴へ」「新ハムレット」の三作は、いずれも太宰好みにパロディ化された作者の分身が狂言廻しや主役を演じ、軽妙な饒舌体による一種の私小説的な性格をもつ作品である。[34]

言ってみれば、ユダ像やユダの語りのいずれも太宰による最大の改変であるが、そのどちらも＜太宰的要素＞／＜太宰的イメージ＞を作中に織り込ませる仕掛けであるのが明らかなのである。ここで見逃してはならないのは、「太宰特有の」・「太宰の最も得意とすると

---

[31] 前掲高橋宏宣、45 頁。
[32] 高橋英夫（1982.5）「ユダ的テーマの系譜」『国文学』27（7）、55 頁。
[33] 鳥居邦朗（1982.9）「『駈込み訴へ』—精神家の死」『太宰治論　作品からのアプローチ』雁書館、105 頁。
[34] 相馬正一（1995.2）「戦時下の創作活動」『評伝太宰治　下巻』津軽書房、206-207 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

ころ」・「太宰調」といった言葉が端的に示しているように、従来この作品が＜私小説＞として読まれてきたその理由は、当時の文壇における共通理解である私小説的な読みにのみ起因するだけではなく、作者太宰治も読者の読みを強く意識した上で、あえて思わせぶりな＜太宰像＞／＜太宰調＞を作中に挿入し、作者と作中人物の一体化の工夫を怠っていなかったというものではなかろうかと思われる。

四、終わりに

> 作品の面白さよりも、その作家の態度が、まづ気がかりになる。その作家の人間を、弱さを、嗅ぎつけなければ承知できない。作品を、作家から離れた署名なしの一個の生き物として独立させては呉れない。（中略）作家は、いよいよ窮屈である。何せ、眼光紙背に徹する読者ばかりを相手にしてゐるのだから、うつかりできない。（中略）作家の私生活、底の底まで剥がうとする。失敬である。安売りしてゐるのは作品である。作家の人間までを売つてはゐない。謙譲は、読者にこそ之を要求したい。[35]

前述したように、「駈込み訴へ」においては、太宰没後に生まれた＜太宰伝説＞（外部環境）がテクストそのものへの評価を逆に支配している傾向が見られる。一方、上掲の引用のように、読者の私小説的な読みに強烈な抗議を示した太宰もまた、読者のそうした読みを逆用する形で虚構のユダ像やユダの語りを練り上げ、自ら読者に発信している様子がうかがえる。そしてこのように、作品の外部環境と内部状況との両者を共に＜作家太宰治＞というキーワードへと集約することこそ、翻案物語（フィクション）であるはずの「駈込み訴へ」が＜私小説＞として長く受容されてきた理由とも言えよう。

そもそも、二回にわたるあの有名な＜芥川賞事件[36]＞以来、「作品

---

35 太宰治「一歩前進二歩退却」（「文筆」昭和 13.8）。ただし引用は、太宰治（1977）『太宰治全集　第十巻』筑摩書房、117-118 頁による。

36 「第一回芥川賞の選考では、（中略）石川達三の「蒼氓」が受賞した。太宰にとって落選の衝撃は大きく、その後の「そこに才華も見られ」るが、「私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて」（「文芸春秋」昭和 10.9）という川端の選評が、太宰をして憤激させた。」三好行雄（1981.9）「芥川賞」『太宰治

臺灣大學 圖書館 版權所有

を、作家から離れた署名なしの一個の生き物として独立させては呉れない。」という「文壇常識[37]」は、昭和十年代の太宰を困らせていることはいうまでもない。例えば、安藤宏が『人間失格』を論じる際、「主人公が太宰その人である理由は何もないのだが、それでも読者は『人間失格』を太宰その人の告白として読んでしまう。[38]」と述べている。そしてその理由として、「つまり当時の読者はセンセーショナルな自殺とほとんど同時に、いわば「遺書」として、この作品を受け取ったことになる。これはある意味では決定的な意味を持っていたわけで、いくら別人だと言われても、やはり作者その人と、大庭葉蔵の運命とを重ねたくなるのが人情であろう。げんに大庭葉蔵の生涯は、昭和十一年までの太宰の実生活と数多くの共通点をもっている。つまり「私小説」として読まれることを作者太宰自身も半ば意図していたわけで、結果的にはそのためにきわめて不幸なことになってしまったのである。[39]」という。

安藤は『人間失格』や『春の盗賊』といった、従来太宰の自伝的小説と見なされる作品を例にして論じてきたのだが、ここで特筆したいのは、「駈込み訴へ」といったような翻案小説でも、「作者の舞台裏―メタ・レベルの情報―を作中に呼び戻してしまう[40]」という特徴が見られるのである。言ってみれば、翻案小説を＜私小説＞と

必携』祥文堂、26 頁。
「芥川賞選考委員だった川端康成への論駁文「川端康成へ」(『文芸通信』) を中心に、芥川賞関連のゴシップを含めたおびただしい記事によって、太宰治という名は広く流通していく。」安藤宏（2009.6)「＜現役作家＝太宰治＞へのまなざし」『展望　太宰治』至文堂、222 頁。
「川端康成・佐藤春夫との応戦で被った磋跌は、太宰をして文学方法の改竄という方向に走らせる。それは「リアルな私小説は、もうとうぶん書きたくなくなりました」（昭 13.8.11 井伏鱒二宛書簡）にも明らかだ。」三好行雄（1981.9)「芥川賞」『太宰治必携』祥文堂、27 頁。

37 ここでいう「文壇常識」は、太宰治「創作余談」にある、「無理にも、さう言ふ。文壇常識を破らなければいけないと頑固に信じてゐるからである。」という言葉をそのまま借用するものである。太宰治「創作余談」(「日本文芸新聞」昭和十二年十二月）を参照。ただし引用は、『太宰治全集　第十巻』(筑摩書房、昭和五十二年二月）96 頁による。

38 安藤宏（2002.10)『太宰治　弱さを演じるということ』筑摩書房、36 頁。

39 前掲安藤宏、43 頁。

40 前掲安藤宏、64-65 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

見なすことの矛盾は読者の勝手な想像によるものとも思われるものの、「駈込み訴へ」の場合、それは作者の創造、つまり作者と作中人物の一体化の工夫をなくしては成り立たないのであろう。

作家の実生活の「事実」にリアリティを求めて作品を読み進める読者の期待を感知したうえで、逆にその要求に応えようと好んで自らの「実生活」を演出して極めて意識的に発信し、情報の送り手と受け手とが連帯する「場」を再構築しようとした物語（フィクション）を、筆者は＜アンチ私小説＞と呼ぶ。この類の小説は、情報の送り手と受け手との間にコードの共有が生じたため、擬似的な「共同創作」（L・ハンチ）・「共犯関係」（安藤宏）が成立し、物語内容とは別にもう一つの「作者と読者の物語[41]」を持ち上げることが可能になるのである。そしてこうした読者の読みを逆利用した上で、等身大の自己像を創り上げ、自ら読者を〈太宰ワールド[42]〉へ招待するという独特の手法こそ、＜反（アンチ）私小説作家・太宰治＞の創作の特徴であると言えよう。

【付記】本稿は、「台大日本語文創新国際学術研討会」（2015.10.25）で発表したものに修正・加筆を行ったものである。席上、示唆に富んだご指摘を多数賜った。なお、論文掲載にあたり、査読の先生方に貴重な御教示と修正意見をいただいた。記して深く感謝申し上げたい。

【テキスト】

太宰治（1938.8）「一歩前進二歩退却」『文筆』
太宰治（1945.2）「駈込み訴へ」『中央公論』
太宰治（1975.11）「月報 3」『太宰治全集　第三巻』筑摩書房
太宰治（1977.2）『太宰治全集　第十巻』筑摩書房

41 詳しくは、前掲安藤宏、及びリンダ・ハンチ著・辻麻子訳（1993）『パロディの理論』未来社を参照。
42 ここで言う＜太宰ワールド＞とは、批評家・研究者の言説の総和としての太宰治のフィクション世界をさしている。

臺灣大學學術期刊資料庫

日本聖書協会編（1981）『旧新約聖書引照附』日本聖書協会
山岸外史（1949.2 再刊）『人間キリスト記』書肆ユリイカ

【参考文献】

相馬正一（1995.2）「戦時下の創作活動」『評伝太宰治　下巻』津軽書房
安藤宏（2002.10）『太宰治　弱さを演じるということ』筑摩書房
池内輝雄編（2007.10）『文藝時評大系　昭和編I　第十七巻　昭和十五年』ゆまに書房
石坂洋次郎（1940.1.31）「文芸時評」『読売新聞』
臼井吉見（1954.9）「太宰治論」『現代日本文学全集 49』筑摩書房
臼井吉見（1956.12）「太宰治論」『文芸 13』13（20）
亀井勝一郎（1960.2）「作品解説」『太宰治全集 4』筑摩書房
菊田義孝（1976.5）「ユダの心」『国文学』21（6）
嵯峨伝（1940.3）「創作月評」『新潮』新潮社
佐藤泰正（1998.6）「ユダにしてキリスト、あるいはバプテスマのヨハネ—太宰治と聖書」『ユリイカ』青土社
高橋清隆（1986.9）「太宰治「駈込み訴へ」と聖書」『静岡近代文学』1
高橋英夫（1982.5）「ユダ的テーマの系譜」『国文学』27（7）
高橋宏宣（2014.1）「裏切りのエシックス—太宰治「駈込み訴へ」論」『福島工業高等専門学校研究紀要』54
田中良彦（2009.9 新版）「太宰治と山岸外史」『太宰治と「聖書知識」』朝文社
玉置邦雄（1974.10）「『駈込み訴へ』の意義」『日本文芸学』9
鳥居邦朗（1982.9）「『駈込み訴へ』—精神家の死」『太宰治論　作品からのアプローチ』雁書館
西原千博（1987.7）「『駈込み訴へ』試論」『静岡近代文学』2
林房雄（1940.3）「新人の世界—文芸時評」『文学界』
宮田茂子（1941.11）「太宰治氏の『東京八景』其他」『近代日本文学

臺灣大學學術期刊資料庫

の分析』霞ヶ関書房
山内祥史（1976.5）「太宰治の死と反響―その直後の新聞紙面を中心に」『国文学』21（6）
山田晃（1983.3）「論語・聖書・愛―「駈込み訴へ」雑記―」『一冊の講座　太宰治』有精堂
陸根和（1995.3）「『駈込み訴へ』論」『実践国文』47
リンダ・ハンチ著・辻麻子訳（1993）『パロディの理論』未来社
渡部芳紀（1976.9）「『駈込み訴へ』論」『作品論　太宰治』双文社

臺灣大學學術期刊資料庫